

はじめに

二〇一七年十月に、成城学園創立百周年記念行事の一環として、成城大学文芸学部の主催で「古代ギリシア、遙かな呼び声にひかれて」と題する講演会が開かれた。副題は、「東京大学ギリシア悲劇研究会から、演劇・映画・学術研究の道へ」であった。本書はこの講演会をもとに編集されたものである。

講演会は講演と座談会の二部からなっていた。第一部では、ギリシア悲劇研究会の支柱であった、東京大学文学部の西洋古典学教授に就き、後に日本学士院の第二十四代院長をつとめられた久保正彰氏と、ギリシア悲劇第一回公演の演出を担当し、卒業後は東映に入社して、日本映画界を担う監督の一人となった中島貞夫氏、それに初期研究会員の一人であり、成城大学で演劇学を講じて、舞台演出にもたずさわっていたわたしが講演した。講演会の冒頭では、ギリシア悲劇研究会創設にかかわった聖心女子大学名誉教授の細井雄介氏が研究会の沿革を述べ、第二部の、研究会の思い出を語る座談では司会をつとめた。

この企画には、次のような背景があった。

今や昔のことになるが、一九五七年から七〇年まで、東京大学にギリシア悲劇研究会（通称ギ

リ研」と称する学生団体が存在した。ギリシア悲劇の研究と上演を目的とする団体で、毎年一回、研究成果としてギリシア悲劇の公演を行った。その舞台は、できるかぎり古代のギリシア悲劇上演の様式を復元しようというもので、公演は全部で十一回に及んだが、最後の二回をのぞけば、すべて東京の日比谷公園にある野外大音楽堂を上演会場とした。ここは二千五百人から三千人を収容したが、上演は毎回満席で、立ち見が出るほどであった。第三回公演からは古代の上演どおり仮面を使用し、三人の俳優ですべての登場人物を演じる三人俳優制や、昼間の野外上演を試みることもした。これはギリシア悲劇の本格的上演として日本で最初であっただけでなく、おそらく世界でも類を見ない上演であったと思われる。しかもこれらすべてが、何の公的助成もなく行われたのである。

だがその公演活動については、演劇研究者の間でも事実関係が正しく把握されていないところがあり、日本の現代演劇史に占める位相も正當に評価されていないところがある。わたしは、この弊の第一の理由は、そもそも研究会活動の全容が記録も公表もされていないことにあると考え、数年前から、すでに少なくなりつつある初期の研究会員にインタビューをしたり、旧会員数人が集まって当時の状況を語り合ったりして、その内容のまとめを始めていた。

その頃たまたまお会いすることがあった成城大学の戸部順一学長に、わたしはこのことを話してみた。ご自身も西洋古典学を専門とする研究者である戸部学長は大いに関心を寄せられ、成城学園創立百周年にあたる二〇一七年に、その記念行事の一環としてギリ研についての講演会を催

してはどうかと提案された。記念講演会の内容は学園の本として出版できるので、ギリ研の活動を公にすることにもなるだろうというのである。

まさに願ってもないことであった。わたしは戸部学長に感謝し、学長の助言のもとに講演者として先述の久保氏、中島氏、細井氏を考えた。幸い三氏の快諾を得ることができ、主催する文学部の村瀬鋼学部長、また多くの事務関係の方々のご協力を得て、二〇一七年の十月十四日（土）、成城大学で講演会が開催されたのである。

本書の編集には、初期会員の細井敦子（西洋古典学）とわたしがあたることになったが、当日のプログラムにしたがい、細井氏および第一部の講演者の講演は基本的にそのまま収録することにし、第二部の座談会では、当日の座談内容を大幅に編集して、それまでにまとめていた旧会員のインタビューや座談記録等を付け加えた。また、細井雄介・敦子夫妻のもとには、以前から研究会活動に関する諸々の文書資料や写真が残されていたが、講演会に会場した多くの旧会員からも、新たな資料や情報もたらされた。それらは、会の活動を具体的に示すものであり、歴史史料としても貴重なものだと思われるので、資料編として付録の形で記載することにした。写真のいくつかは、座談会の中にも挿入されている。

このように本書は、多くの旧ギリ研会員の協力に負うものだが、企画・出版はすべて成城学園

の援助・協力によっている。ご尽力くださった戸部順一学長、村瀬鋼文芸学部長はじめ、学園、大学の関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。

毛利三彌

表記について

本書においては次のような方針をとっている。

- 1、講演は、すべて講演者の原文のままとする。
- 2、第二部「座談会」においては、「ギリシア」の表記は、講演会のタイトルに合わせて「ーア式表記（ギリシア）」とする。見出しの公演題目は当時の表記のままとするが、本文中では、長母音の音引は原則として省略する。但し、慣用に従って残した場合もある（例…イスマネー、テーバイ）。Φ音はp式で表記する（例…ソポクレス、ピロクテス）。作品題名（略称も含む）は二重カギで囲み、登場人物名にはカギをつけない（例…作品題名〔縛られた〕プロメテウス」、人物名プロメテウス）。
- 3、「資料編」においては、趣意書・公式紹介文書・研究会誌・公演パンフレット・各種印刷物中の固有名詞の表記は、原文のままを原則とする。編者による記述中では、会誌の編集発行者としての研究会名称が「東京大学ギリシア悲劇研究会」であること、および発音上の慣用を考慮して「ーヤ式表記（ギリシア）」を用いている。
- 4、本研究会の名称としては、カタカナ部分に関して三通りの表記（東京大学ギリシア／ギリシア／ギリシア悲劇研究会）が用いられている。

目次

はじめに

毛利三彌 3

ギリシア悲劇研究会の歩み

細井雄介 11

第一部 講演

古代ギリシア——遙かな呼び声にひかれて

久保正彰 24

〈ギリ研〉から映画へ——監督業の半生

中島貞夫 39

古代の叫びと近代の沈黙

毛利三彌 55

第二部 座談会

ギリシア悲劇研究会の思い出

72

ギリシア悲劇研究会の始まり

75

第二回公演『オイディプス王』に向けて

82

ギリ研第二世代のかかわり

99

第二回公演『アンティゴネー』とともに

112

第三回公演『縛られたプロメテウス』の新しい試み	123	第四回公演『アガメムノン』——集大成的上演	134	第五回公演『ピロクテエース』——演出のさまざまな問題	142	第六回公演『トロイアの女』とその後	154	ギリ
研最後の二つの公演	160							

資料編

I	東京大学ギリシャ悲劇研究会	公演一覧	234
II	公演スタッフ・キャスト・劇場		233
III	公演パンフレット等		220
IV	公演収支決算報告		211
V	会誌『ギリシヤ悲劇研究』1号～5号	目次一覧	197
VI	研究会活動関連文書		192
VII	会員および協力者リスト		182

あとがき

細井敦子

237

ギリシア悲劇研究会の歩み

細井雄介

日本語の楽しい底力に頼り「ギリ研」という言葉を使わせていただきます。「東京大学ギリシア悲劇研究会」の略称です。

「ギリ研」はなぜ続いたか。日比谷公園ただ一晚の芝居でお金が残ったからであります。

教養課程二年を了え、本郷の文学部へ進み、昭和三十二年春の四月、ガイダンスのあと、また出合ったか、会を作ろうとの声で、定員二十名の三分の一が集いました。その勢いに「学生にしかできないことをやれ、ギリシア悲劇ならば上演だ」のお声がかかり、決断は速く、直ちに学内団体として正式に登録、結末の度合は高まり、大学の五月祭では上演を謳って仲間を集めます。活動の中心は必ずしも芝居好きでなく、この会員構成の在り方が、会を永持ちさせた理由のひとつかも知れません。

けれども上演となれば舞台で演じる俳優が要ります。もとより学内に演劇集団は幾つもある



り、名乗り出た三人わけでも加村起雄は以後何年もの大黒柱、「ギリ研」全体の強烈な推進力となります。またギリシア劇ではクロスすなわち合唱隊が舞台を離れませんが、学内の合唱団が協力します。こうした仲間の信頼を一身に集めて、何ごとにも揺がず堂々と演出を果したのが本日の中島貞夫です。九月から中島は台本づくりに入りました。

他方で製作担当者は学科先輩の表を作り、寄付を仰いで歩きます。叱られては励まされもする毎日ですが、後年会社「リクルート」を立上げる森村稔の歩き回りは目覚しく、次第に繋りの輪を編んで「朝日新聞」の後援を得るまでになりました。

あれこれ打合せの場所はのびやかな喫茶店「ルオー」、学年度末三月一日、ここで天の助けが降ります。私どもの話に隣席の若い御夫婦が入られたのです。ハーバードからお帰りの久保さんでした。研究例会に理論の背骨が通り、中島と加村は日参とも言えるほどに久保研究室を訪ねては感激を会員に伝え、「ギリ研」生活の活気は飛躍的に増しました。

学年末の試験が終了しますや幼稚園の庭で上演の稽古、基礎を固めて日比谷での仕上げ、六月二日（月）夕六時ついにオーディブス王が登場、「母親を殺し父親と結婚」とやってくれました

が、ざわめきも厳肅な重みが一瞬に抑えて、会場は深い沈黙へ戻っていたかと思えます。

会員券は百円、当日の朝で捌けていたのは一千枚、目標は二千枚でしたから赤字覚悟で参りますと劇場には人々の長い列であり、入場制限数の三千名を越えました。公約の雑誌『ギリシヤ悲劇研究』を出して残るお金を確めますと卒業の年であり、一人を除く学科生全員が卒業ですが、新たな会員が翌年の「アンティゴネー」公演を決めました。

歴史学の吉岡力先生が御自身の「歴史教育研究所」毎週一晚を使わせてくださり、ここが大学紛争の混乱に至るまでの「ギリ研」の道場です。大学の教室と同じく春秋二十週ほどの夕方ここに集い、久保さんを囲む討論の楽しみが私どもの暦の柱となり、この夕こそが活動の母胎であり、「ギリ研」の実質でありました。

「アンティゴネー」は初回のやり方を敢えて繰返しますが、まず台本、言葉が問題となりました。芝居の台本はいわゆる精確な翻訳とは別物であり、一行一行舞台を思いつつ、第五回公演までは久保さんの手に成る台本で声が響き、劇場の試煉を経た言葉は五冊の雑誌に納められています。つぎは仮面です。三千名の観客に生身の顔は見えない。こうして仮面がどうしても必要な「プロメテウス」が第三回の公演となりました。初めから終りまでただ一つの顔として捉えなければ仮面は作れない。私どもには戯曲を読むときでも、この人物の仮面はどれか、と問う習わしが付きました。第三はやはりクロス、歌を唱って一体となり、発言を一人に委ねるクロスは紛れもなく政治的圧力集団であり、第四回公演で男性会員の主力はみなクロスの一員となって舞台に厚み

を加えたかと思えます。

劇場の音響条件は宜しくありません。写真で人物はみなマイクロフォンに向けて語っており、あるいはこれが善かったのかも知れません。役者が上手いか下手かは大した問題でなくなり、はつきりと言葉を語れるか、知性と意志が見えるか、人物の品格は伝わるか、このことさえ納得できれば安心、ここに生れた調子が「ギリ研節」とからかわれました。

昭和三十三年六月から四十五年十月まで、十三年にわたる十一の舞台でした。現存の戯曲総数三十三とされていますが、三分の一は公演したことになります。題目を並べると、脈絡のよく解らぬ順序である、と責められるでもありません。けれども、そのつどの公演で生じる問題の解決努力こそが、翌年の上演を決定させて、振返ればこの系譜になっていたのであり、筋道の説明はパンフレットそれぞれの烈しい文章に読取れましょう。

ちなみに今日ではギリシア悲劇も話題となり、派手な舞台の姿もたびたび報じられますが、収支を重んじる興行形態では動員できる観客数に限りがあり、実情はあくまで名作戯曲の摘み食いと捉えるのが妥当でありましょう。一晚の観客は最低二千五百名とした研究会公演と商業演劇の限界とは、次元の相異なるところにある、としなければなりません。

時は移り、大学は紛争、「研究所」の夕も閉じられます。それでも一年の休みを置いて公演、昼日なか太陽の光を浴びての誇らしい冒険でしたが、十一月の風は冷た過ぎました。年明けての一月、本郷の安田講堂は機動隊の水を浴び、倉庫にあった「ギリ研」の財産も水浸しで消えます。

さらに一年、演劇は「アングラ」、地下の小芝居へと流れ、私どもも室内劇として実験を試みましたが、野外と室内との決定的相違を克服できずに終わりました。

かつてわが国にはチャンバラなる胸のすく傑作の世界がありました。これが、どうも本当らしくないとして手が入りますと、どこか佻しい代物ばかりに変わりました。もう一度それぞれの要素で組立てようと努めても最初の痛快な傑作にはとても届きません。やはり時と所、そして人が要るのであり、演劇ではギリシアにこそ最初の産声でありました。声に応えて、これを十年あまり、コロス、仮面、言葉という三項、三つの柱の力学として甦らせ、姿を多勢の方々にも確めていただいたのち私どもは眠りに就きました。

わが国に入つたものは決して消えないと言われます。そのなかにギリシア悲劇も数えられましようか。

今日やや年を経ましたが、眠れば夢を見て、ふたたび目覚め、立上る時も生じましよう。その所はどこか。場所だけは確かであります。これまた人類の築いた最も偉大な制度のひとつ学園においてであり、時代や世情がどれほど変わろうと、外から寄せる圧力はしっかりと防ぐ壁のなか、自由の若さにおいてであることは間違ありません。

平成二十九年十月十四日 午後



プロメテウス (古山桂治)

その中を通っている棒にしがみついで、古山(桂治)さんが、声をからしても更に大きな声で叫んでいた。半世紀以上も前のことです。私は裏方でしたので、すぐそばに寄り添って、あの声を何度も何度も聴いていました。最後の方になると、声もつぶれ、ガラガラ声で、それでも一生懸命頑張って声を出していました。腹の底に響くような、ものすごい声

でした。」

毛利 あるときは久保さんも大変だったらしい。一度、なんでみんなは怠けてるのか！って叱られたことがあった。それを松川さんに言ったら、松川さんは、みんな自分がいちばん大変だという気がするのよねって言った。すごく共感したのを覚えている。

松川 そんなこと言った？ 全然覚えてない(笑)。それで、湯川さんの言うように、仮面作りは新制作協会の高橋米吉さんと山口幸子さんだったでしょ。私も衣裳との関係があるので、何度か制作中のアトリエに見学に行ったけれど、試行錯誤で大変だったみたい。それに、『プロメテウス』はクロスの数が二十八人と多かった。『ギリシヤ悲劇研究』第三号に載ってる高橋武雄さんの報告によると、舞台俳優の仮面はアトリエで仕上げまでやり、クロスの方は、アトリエで原型とその



コロス仮面制作（屋外で乾燥中）

る。久保さんもその時は、西洋古典の大学院の助手で駒場の研究室にいらしたから、暇さえあれば来て同じ作業をなさった。私の日記に「五月十七日。昼頃、仮面を（東大）自動車部の車に載せた。コロスの稽古場の跡見へ持ってゆくため。出発を見送って久保さんは一言、ああ仮面がなくなつてさびしいな、と言われた」とある。

石膏逆型が作られて、逆型を駒場の「同窓会館」の二階の室に持ち込んで、「逆型へのパルプ貼り込み」——「乾燥」——「逆型からの剥がしと色付け、ニス塗り」の作業をしたとあ

毛利 なにせ、アイスキュロスは初めてだし、大作だし、演出の加村は、彼も留年して俳優座の俳優養成所に入っていて、その伝手からか、スタッフに錚々たるメンバーを頼んできたものだから——

石井 パンフレットをみると、装置は高田一郎、音楽は林光、照明は吉井澄雄、振付は石田種生となつている。

毛利 こういうスタッフのみなさんは、その後は大家になるわけだけど、その頃はまた、新進気鋭のところだったからね、加村の情熱的な要請に応じたんだと思う。

伊藤 でも、すでにそれなりに活躍していた人たちだったでしょう。

毛利 それはそう。高田さんなんか、斬新な舞台装置で注目されていたからね。二年前の田中千禾夫の『マリアの首』の装置は特に。『プロメテウス』の装置もすごい岩山のデザ

古代ギリシア 遙かな呼び声にひかれて

——東京大学ギリシア悲劇研究会の活動

2019年3月20日 初版第1刷印刷

2019年3月30日 初版第1刷発行

編者 毛利三彌 細井敦子

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／野村 浩

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1798-9 ©2019 Printed in Japan